

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01189

研究課題名（和文）ケニアの聾／聴者の相互行為態に関するヴィジュアル・メソッドを用いた民族誌的研究

研究課題名（英文）An ethnographic study using visual methods on the interaction of deaf/hearing people in Kenya

研究代表者

吉田 優貴（古川優貴）（YOSHIDA, Yutaka）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：60737063

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、コロナ禍により当初予定していた現地調査のほとんどができなかったものの、研究期間を1年延長し、現地調査にて大人の聾者へのインタビューを行うとともに、その際の手話通訳を介した相互行為場面の動画収録を行うことができた。また、渡航が不可能だった期間には、オンラインにて、聾者と聴者の共生のありようの背景にあると考えられる人間観や価値観についての聞き取り調査を行った。本課題に直接関係する論文は現在執筆段階にあるが、「人々の共生のありよう」を考えるうえでも根幹となる、「死」や「生」に関する民族誌的データに基づいた論文を発表することができ、新たな研究課題へとつなぐことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究期間中の主な成果物として「ケニアのナンディ社会における死と生のエスノグラフィ」（牛村圭編著、『戦争と鎮魂』所収、晃洋書房、2024年刊行）を挙げることができる。聾／聴者に拘らず、人々がどのような連関意識のもとに生き、死を迎えるか、いかなる規範が人々の「死後」にも影響を及ぼしているのか、聾／聴者の共生の前提にある人々の人間観、死生観を明らかにしたものである。同論考では、日本社会とは「異なる」社会における「人の死」の扱い方に関する事例から、現代日本社会における医療・福祉のあり方、他者と共に生きるこの意味を問いかけた点で学術的にも社会的にも意義のあるものと考えている。

研究成果の概要（英文）：Although the coronavirus disaster prevented most of the initially planned fieldwork, the research period was extended by one year, and interviews with adult deaf people were conducted during the fieldwork, and video recordings of interactive situations with sign language interpreters were made during the fieldwork. During the period when travel was not possible, I also conducted online interviews about their views on people and values that are considered to underlie how deaf and hearing people live together. Although a paper directly related to this project is currently in the writing stage, I was able to publish a paper based on ethnographic data on death and life, which is fundamental to considering 'the way people live together', and I was able to link this to a new research project.

研究分野：文化人類学

キーワード：ケニア 聾／聴者 ヴィジュアル・メソッド 相互行為態 共生

1. 研究開始当初の背景

これまでの聾者のコミュニケーションをめぐる先行研究で主流だったのは、手話には音声言語と同じ特徴があるとし、コード・モデルの統語論的視座で手話文法を抽出する研究であった (eg. Stokoe, William, 1960[1978] *Sign Language Structure*. Linstok Press., Liddell, Scott K. & Robert E. Johnson, 1989, *American Sign Language: the phonological base. Sign Language Studies.*, 64:195-278 ほか)。他方、菅原和孝は、人の身体コミュニケーションを「ノンバーバル(非言語)・コミュニケーション」と名付けること自体が身体を言語に従属した補助的なコミュニケーションとして位置づけたものだと批判し、身体を、厳密なコードの体系に従った意味するものとしてある以前に他者と外界に向かって開かれ相互に疎通しあう「前＝交通」として捉え直した(菅原和孝ほか[編], 1996, 『コミュニケーションとしての身体』, 大修館書店)。また、人のコミュニケーションを言語行為以外のさまざまなことが起きている「マルチ・モーダル *multi-modal*」な営みとして捉え、コミュニケーションにおいて画像の使用、筆記、身振り、熟視、発声、姿勢などがどのように出現・展開しているかに着目した研究が活発化している(総論として、Jewitt, C. [ed.], 2009, *The Routledge Handbook of Multimodal Analysis*)。

これらを踏まえ、本研究は改めて「身体」という観点から、ケニアの聾者同士、聾者と聴者、聴者同士の日常会話のみならず歌やダンスを含むコミュニケーションを「身体相互行為態」として探究するものである。「相互行為態」としたのは、これまでの「相互行為」現象をめぐる諸研究が「個々の主体としての人」の存在を前提としてきたのに対し、本研究は「出来事としての身体群のマルチ・モーダルな共振」として捉えるからである。そのうえで本研究の核となる問いは、「人間にとってコミュニケーション・ツールとしての身体とは何だったのか、居合わせた人々の経験が言語で物事を伝え合うという目的を超えていかなる「身体相互行為態」としてあるのか、」である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ケニアの聾者と聴者の「身体相互行為態」について、 実地調査に基づいて民族誌的に明らかにすることである。これまで聾者と聴者間のコミュニケーションは、音声言語と手話言語という使用言語の違いに基づく困難さが強調されてきた。しかし、ケニアでは、寄宿制中等聾学校に聴者の中等学校が併設され両者が別学でも生活を共にする例、聾者が入学可能な職業訓練校には聴者にも門戸を開放する例が少なくない。加えて、本研究の調査地のほとんどがキリスト教者であり、日常の教会活動を通じて、聾／聴者が交流する例もある。こうした環境において、彼らはいかにして協働的に活動しているのか、そこで何かしらの課題があった場合、どのようにそれを乗り越えようとするのかを本研究で探求する。

これにより、日本では一般的な聾者／聴者間にあるとされるコミュニケーション問題の解決の糸口みならず、より普遍的に、異なる言語使用者同士が居合わせる場での相互行為のあり方について新たな知見を得ることが見込まれる。

3. 研究の方法

当初の予定では、初年度より、毎年度ケニアで実地調査を行う予定であった。しかし、コロナ禍の影響により、ケニアへの渡航のみならず、ケニア国内での移動にも制限が生じたため、予定していた調査ができなかった。そのため、研究計画を1年延長し、4年目によりやく実地調査を実現させることができた。

(1) コロナ禍でのオンライン調査

実地調査が困難だった期間は、文献研究のほか、Zoom や WhatsApp(音声／ビデオ通話アプリ)を介して、聾／聴者が共生するにあたって共有していると考えられる社会的価値観についてのインタビュー調査を行った。

(2) 実地調査

2023年8月にケニアへの渡航が実現し、長年の調査拠点であったナンディ郡のほか、メル郡でも、特に大人の聾者と聴者の現在の交流のあり方のほか、聾者の幼少期を含め、ライフステージの変化に伴い、周囲の人々との身体を介する相互行為のあり方にも変化があったのかどうかについてインタビュー調査を行った。インタビューでは、360度撮影可能なアクションカメラを用いることで、インタビューの内容のみならず、語り手＝聾者のコミュニケーション手法についても動画収録することができた。

(3) 過去の調査で得た聾児のコミュニケーションとの比較分析

これまで行ってきたケニアでの実地調査に基づく研究では、相互行為の分析対象の中心は聾児であった。聾児の場合、複数人が同時に会話を始めながらも、決して「独り言の集積」ではなく話が弾んだり、聾児と聴児が入り交じって即興的にダンスをするといった様態が見られた(画像1および画像2)。これらを考察するにあたり、諸研究が前提としてきた「個々の主体としての人」間で「相互行為」が展開するという考え方から距離を置き、「身体出来事群のマルチ・モーダルな共振」という「相互行為態」研究を構想した。すでに述べたように、コロナ禍により実地調査がほとんどできなかったため、2023年の短期間の調査で収録できた動画データは多くないが、この聾児たちのコミュニケーションの様子を収録した動画と、大人の聾者と聴者のコミュニケーションを収録した動画の比較検討を始めることで、今後の課題を見いだした(後述)。



画像 1(2004 年撮影)



画像 2(2011 年撮影)

4. 研究成果

当初の研究計画では、少なくとも 3 回の実地調査で、聾／聴者の相互行為を動画で収録し、分析・考察する予定だった。しかし、コロナ禍により 1 回かつ短期間での実地調査となり、きわめて限られた期間で集中的な調査を行わざるを得なかった。反面、当初は想定していなかった、オンライン調査を行うことができ、実地調査が行えなかった分を一定程度補う民族誌的データを得ることができた。以下では、(1)2023 年度に行った実地調査での成果と、(2)2020 年度からの 3 年間に行ったオンライン調査での成果について述べたうえで、(3)本研究課題のまとめと、新たな研究課題も含めた今後の展望について述べたい。

(1)2023 年の実地調査

2023 年 8 月に、ケニアの Meru 郡および、Uasin Gishu 郡にて、大人の聾者に対し、聴者の通訳を介しながら、インタビューを行った。その際、360 度撮影可能なアクションカメラを用い、調査者も含め、インタビューの場に居合わせた全員の相互行為の様子を動画で収録した。なお、すべてのインタビューに関して、調査者が 2003 年にケニアでの調査を開始して以来の調査協力者で、現在は Meru 郡に所在する聾学校の校長を務めている S 氏に手話通訳を依頼した。

M-①Meru 郡の聾学校の職員 A 氏(聾者)へのインタビュー

M-②A 氏の妻(聾者)へのインタビュー

M-③Meru 郡の聾学校の教員 B 氏(聾者)へのインタビュー

U-①C 氏(聾者)、自営業へのインタビュー

U-②D 氏(聾者)、事務職へのインタビュー

U-③E 氏(聾者)、事務職へのインタビュー

U-④F 氏(聴者)、AIC 教会における手話通訳ボランティアへのインタビュー

(3)本研究課題のまとめ

本研究課題の背景には、2003 年から 2012 年までの、ケニアの聾児を主な調査対象とした研究成果があった。聾児たちの互いを見ずに賑々しく会話をするさまや、聾児の誰からともなくおどりだし、体の動きが次の動きを呼ぶダンスのさまなど、フィールドで展開した出来事に寄り添った結果として、「出来事としての身体群の共振」という新しいコミュニケーション観を打ち出すことになった。

このコミュニケーション観から本研究課題の着想に至ったが、延長した年の 1 回限りの現地調査だったこともあり、収録した相互行為場面の精査は必ずしも十分に行えていない。また、その 1 回の現地調査では、「インタビュー」というやや改まった場面であった。その場面では、質問者が訊く間は、調査協力者である聾者は静かになり、質問が終わったところで話し始める、という「話者交替」がきれいに見られた。このインタビューの 1 回をもって「聾児と大人の聾者とのコミュニケーションの仕方の違い」と言うことはできない。より多くの相互行為場面を収録し精査することで、聾児と大人の聾者の相互行為のあり方の「違い」が、場面拘束的なものなのか、それともライフステージの変化によるものなのかということを考えていく必要がある。

他方、本研究課題をより深く掘り下げるうえで、これまで自身が等閑視していた、人々のコミュニケーションの仕方、ひいては、生き方の背景にある、(ときに「矛盾」することもある)伝統的価値観とキリスト教的価値観の併存についての探究が必要であることを見いだした。本報告には掲載できないが、インタビューを通して、大人の聾者の幼少期の経験やライフステージの変化と、周囲の聴者との共生のあり方、そしていついかなるときにどのようなコミュニケーション手法をとるのか、といったことが絡まり合っていることが窺えた。今後、これらを具体的に明らかにし、更に、これまでの研究と併せることで、新しい民族誌を提出することを目標にしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉田優貴
2. 発表標題 「五感を包摂する音楽経験：ケニアの聾児の躍り/踊りを出発点に」
3. 学会等名 民族藝術学会第166回研究例会「ケニアにおけるarts/ : フィールドから考える」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田優貴
2. 発表標題 「ケニアの聾者 / 聴者との民族誌的フィールドワーク 私の場合」
3. 学会等名 フィールドネット・ラウンジ（東京外国語大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉田優貴
2. 発表標題 人を分けること、つなぐこと：思想・身体・ケニア
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田優貴
2. 発表標題 ケニアの聾の子供の"dorama"から『時間』を考える
3. 学会等名 科研費新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築 第6回領域会議」吉田優貴・山本寿子・小谷弥生，分科会「顔・身体の時間性：『動き』における静止・分断・連続」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉田優貴
2. 発表標題 輪郭なき動態としての身体群：ケニアの聾児の相互行為態を例に
3. 学会等名 科研費新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」領域内シンポジウム「身体性シンポジウム」セッション2「（他者を含む）環境に広がる身体」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉田優貴
2. 発表標題 ケニアの人々の顔身体と自／他意識（ポスター発表）
3. 学会等名 科研費新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築 第7回領域会議」
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 零境	4. 発行年 2023年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 272
3. 書名 『LISTEN リッスン』の彼方に	

1. 著者名 河野 哲也、山口 真美、金沢 創、渡邊 克巳、田中 章浩、床呂 郁哉、高橋 康介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 464
3. 書名 顔身体学ハンドブック（「コラム5「複言語使用」とからだがものを言うコミュニケーション」担当）	

1. 著者名 牛村圭	4. 発行年 2024年
2. 出版社 見洋書房	5. 総ページ数 294
3. 書名 戦争と鎮魂	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>フィールドワークってなんだ?: 異分野方法論談議 (霊長類学・言語学・歴史学・人類学) https://fieldnet-aa.jp/lounge/.assets/20230109_Fieldnet_lounge_Report.pdf</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------